解説

少女マンガという総合芸術

吉元由美
（作詞家、作家）

熱烈な少女マンガのファンの人々に向けて解説をすることに、少しばかりの恥ずかしさを感じている。なぜなら私は決して多くの少女マンガに触れてきたわけではないので、釈迦に説法のような気がしてどうしても臆するところがあるのだ。宝塚をまったく知らない人が天海祐希について語るようなものだが、少女マンガを知らない世界の立場から、自由に語りたいと思う。

先日ある雑誌で、少女マンガと文学との関りについてインタビューされた。少女マンガと文学と聞いてまず頭に浮かぶのは、大島弓子と『この娘うります！』の作者、萩尾望都である。文学と言っても特に純文学。それも哲学の匂いのする純文学的なものを感じる。たぶん作者の内的探究の傾向が色濃く投影されているのだろう。

そこで純文学とは何ぞやということになるのだが、人間の心の綾を細かく浮き彫りにした文学と私自身は捉えている。一見どたばたのエンタテインメント・ストーリーである『この娘

うります！』のある一面では、十五歳の少女の独白を通して、彼女が変容していく課程が描かれている成長の物語である。このマンガを物語に置き換えると、きっと純文学的な匂いのする小説になるだろう。ときおり出てくる独白の場面で、主人公はしっかりと〝文学〟しているのだ。と同時に改めて感じたのは、この作品の戯曲的なエンタテインメント性である。一次元的な紙の上で、かくも三次元的な感覚で楽しめることに感心した。

物語の設定が、少女たちの夢をそのまま詰め込んだ宝石箱のようになっている。主人公は十五歳のかわいい少女ドミニク。十年前に母親を亡くし、父親はオートクチュールの子供服のデザイナー。それも物語の舞台はパリ。ある日、ひょんなことからモデルにスカウトされ、またひょんなことから映画にも出演。まわりにはハンサムで魅力的な男の子たち。登場するすべての美しい男の子たちとつかの間の恋をして、最後にはもちろんいちばんすきな人と結ばれる……。そしてアフリカの草原へ、ふたりの愛を育てに行く。まるでおとぎ話のプリンセス・ストーリーである。

しかし『この娘うります！』には、おとぎ話によく見られるような不遇な時期が出てこない。あえて挙げるとすれば、クラビーの気持ちがわからなくて悶々としてしまうところだろうか。しかしそれは恋をした女の子なら必ず経験する通過儀礼のようなもので、シンデレラが継母にいじめられるような不遇さは感じられない。おとぎ話の中で主人公がつらい思いをすればするほど、読者は感情移入してどんどん惹きつけられていくものだ。それなのにおと

ぎ話的などきどきさをもって読みきってしまうのには、何かしっかりとした理由があるのだと思う。

現実生活に生きている私たちからするととんでもなくうらやましい少女の物語だが、なぜかそれが嫌みに感じられないのは、ドミニクの悶々とした恋心にとてもリアリティーがあるからではないだろうか。身近なリアリティーの存在が、作品を読者に近づける。ちょっとありえないような華やかな設定の中で、ドミニクの恋心のリアリティーがいちばん輝いているのだ。反対に言うと、日常の中にあるリアリティーを日常感のない背景に置くと、作品がバージョン・アップするということなのだと思う。そういう意味で新しいおとぎ話と言えるのではないだろうか。

登場人物たちの恋愛模様がおもしろい。カレイドスコープをのぞき込んだときのように、ちょっとしたきっかけでくるくると展開していく。もちろん最後には納まるべきところにみんなが納まることになる。物語をリードしていく上で、心理展開、場面展開は必須のものだが、いま流行っているテレビドラマを観るような小気味よさとストーリーの吸引力がある。手許の作品集によると、『この娘うります！』の初版は一九七七年。初出の正確な年はわからないが、いまから約二十年程前の作品ということになる。二十年の歳月を経て、トレンディー・ドラマ的（この言葉さえ死語になりつつあるのに）なストーリー展開を持たせたところに、萩尾望都氏の才能が感じてならない。

もうひとつ興味をそそられるのは、男装をしたり女装をしたり、ともすると彼らはホモセクシャルかもしれない……と思わせるようなスリリングなスパイスを効かせているところである。いまでこそそのような話題が公で語られるようになったけれど、とにかく二十年前の作品である。もしも当時高校生だった私が読んでいれば、こっそりくすっと思ったかもしれない。それは一九九六年に読んでも、古さを感じさせないスパイスになっている。時代を読んでいたのか、先見の明があったのか、萩尾氏の世界の切り取り方は常に新鮮さを失わないのである。

さて戯曲的なエンタテインメント性について言うと、登場人物それぞれが〝歌い〟〝踊って〟いるのである。つまり主人公以外の人物の感情も、手に取るように伝わってくるのである。人生を歌いたい。人生とダンスをしたい。私たちは自分の人生を生きているわけだが、自分とこの人生が離れているような感覚に陥ったことはないだろうか。自分のことなのに自分がわからない……。そんな時期が誰にでもあることと思う。そういうときは大体において、自分の感情や状況が見えないときである。深い井戸の底に取り残されてしまったような感じである。人生を歌い、踊るというのは、そのときどきの自分の感情と共にあるということなのだと思う。クラビーの気持ちがわからずに悶々としてしまったときのドミニクは、たぶん井戸の底にいるような感じを味わっていたに違いない。けれど彼女はその状況にも正直に向きあい、どうしようもない感情をしっかりと感じている。同じようにそれぞれの登場人物が、

自分たちの感情に素直に任せているところに、読者は安心するし、また共感する部分も多いのだと思う。歌うように、踊るように生きている登場人物は、一次元である紙の上を飛びだして、人生を謳歌しているのである。みんなの歌声やステップが、紙上から聞こえてきそうだ。そういう意味で、『この娘うります！』は三次元的な要素、特にミュージカル的なエンタテインメント性を持っていると思う。

好きなくせにそっけなくしてしまう。好きだからこそ冷たくしてしまう。相手を思うあまりに間違った深読みをしてしまう。誤解が誤解を招き、人間関係の糸は絡まっていく。恋に未熟な少女たちも、いくつかの恋を通り過ぎてきた大人の女性たちも、一度は必ず経験したことのある気持ちなのではないだろうか。どうにも解明できない摩訶不思議な恋という心理現象について、古代から多くの説が語られている。いつの時代も恋愛本の読者が尽きないのは、時代を超えた永遠のテーマだからだろう。誰もが経験したことがある恋心や葛藤や嫉妬をそのまま素直な形で書き込んだところが、きっとこの作品を成功させている一つの要素だろう。そして自分の心に正直に、勇気を持って愛する人に向かっていくという、私たちがなかなかできそうでできないことをやってのけた主人公に大拍手なのである。そしてポジティブに自分の可能性に向かって行く姿は、私たちを大いに励まし奮い立たせる。そのシンプルさが、とてもおとぎ話的なのである。そしていつの時代も私たちはおとぎ話に胸をときめかせ、おとぎ話から学ぶもの。現代のおとぎ話である少女マンガに描かれている普遍的な人間

の心理に、触れてみるのもいいものだと思う。そしてその中には純文学も戯曲も含まれているのである。少女マンガは、おいしいところを集めた私たちの総合芸術とも言えるのではないだろうか。

花の旧制高校シリーズ!! **摩利と新吾** 全8巻 木原敏江	海洋冒険ロマン！ **サラディナーサ** 1〜3巻 河惣益巳	ハードなスパイ・アクション！ **Z**—ツェット— 全1巻 青池保子
大人の恋の短編集!! **さくらんぼ爆弾** 全1巻 柴門ふみ	ほんわかユーモラスな傑作集。 **空の食欲魔人** 全1巻 川原 泉	奇想天外なシュールコメディ。 **イブの息子たち** 全3巻 青池保子
ロンドン貴族ストーリー！ **バジル氏の優雅な生活** 坂田靖子 全5巻	新感覚スポーツドラマ！ **甲子園の空に笑え！** 全1巻 川原 泉	戦慄のスペクタクル・ロマン！ **青のメソポタミア** 全1巻 秋里和国
マジメでおかしい動物コメディ!! **動物のお医者さん** 全8巻 佐々木倫子	愛と家畜と作物の感動物語！ **美貌の果実** 全1巻 川原 泉	ファンタジーの最高峰。 **綿の国星** 全4巻 大島弓子
究極の愛の世界。 **風と木の詩** 全10巻 竹宮惠子	1年366日の精選漫画名言集!! **本日のお言葉** 全1巻 川原 泉	心に深いリリカル・ロマン！ **夏のおわりのト短調** 全1巻 大島弓子
ハートフルな青春ドラマ!! **エイリアン通り(ストリート)** 全4巻 成田美名子	ハイセンス学園コメディ！ **笑う大天使(ミカエル)** 全2巻 川原 泉	感性豊かな傑作短編集！ **バナナブレッドのプディング** 全1巻 大島弓子
ファッショナブル青春ストーリー！ **CIPHER**(サイファ) 1〜3巻 成田美名子	哲学ワンダーランド！ **フロイト1/2** 全1巻 川原 泉	淡い想いの短編集！ **さようなら女達** 全1巻 大島弓子
笑撃のギャグ・バトル！ **黒のもんもん組** 全1巻 猫十字社	オリエンタルファンタジー!! **中国の壺** 全1巻 川原 泉	センシティブ短編集！ **全て緑になる日まで** 全1巻 大島弓子

白
白泉社文庫

この娘うります！

一九九六年九月十八日　初版発行
一九九七年六月十五日　第五刷発行

著者……萩尾望都　©Moto HAGIO 1996

発行人……麻木正美

発行所……株式会社 白泉社
〒一〇一 東京都千代田区西神田三―六―四
電話 〇三―三二六五―一九九七（編集）
〇三―三二六五―一九一九（販売）

印刷製本……凸版印刷株式会社

装幀……羽良多平吉&エディックス
HAKUSENSHA Printed in Japan
ISBN4-592-88326-8
乱丁・落丁本はおとりかえします。定価はカバーに表示してあります。